

脊椎手術解剖アトラス

菊地臣一 ● 編

〔評者〕 松本守雄 (慶大教授・整形外科学)

脊椎・脊髄外科の手術手技は、新規の手術機器やインプラントの開発に伴って、近年、長足の進歩を遂げており、多くの脊椎疾患が従来と比較してより低侵襲に治療することが可能となった。一方で、手術解剖に関する理解が不十分なまま行われた低侵襲手術や新規手術手技による合併症の報告が相次いでいるのも残念ながら事実である。解剖の知識を持たずに手術を行うことは、海図も持たずに荒波に漕ぎ出すようなもので、いかに新しいインプラントや手術機器を用いたとしても無謀な冒険以外のなにものでもない。われわれ外科医は常に手術解剖という基本に基づいた手術を心掛ける必要がある。

このたび、菊地臣一先生とその門下の先生方が編集・執筆された『脊椎手術解剖アトラス』が上梓された。本書は菊地先生のライフワークである脊椎の肉眼的解剖学に裏打ちされた手術解剖書である。頸椎から仙椎まで脊椎のあらゆる部位の詳細な局所解剖が、実際のカラーの解剖写真およびシェーマによりわかりやすく示され、手術のアプローチや手技と有機的に紐付けられている。本書を読むと、われわれが何気なく行っていた手術手技が、解剖学的ある

いは病態論的にどのような意義があるのかをあらためて思い知らされて、目から鱗が落ちる思いがする。既存の脊椎手術解剖書は臨床的観点からのartの要素が不十分であり、一方、既存の手術手技書もともすれば技術論が先行してscienceの視点に欠けている。菊地先生をはじめとする著者の先生方は本書を「科学(science)としての解剖」そして「臨床(art)解剖」を統合させた過去に例を見ない斬新な手術解剖書に仕上げられている。

本書のさらなる特徴は、各部位の手術解剖に関連して、その分野のエキスパートが手術手技のコツを明快に解説していることであり、本書をより実用的・実践的なものにしていく。また本書の後半には内視鏡下手術やインストゥルメンテーション手術などに関連した手術解剖と手技に関する詳細な解説が行われている。これらの比較的新しい手術手技こそ、安全に行う上で手術解剖の熟知が必要であり、本書にはこれらの手術に取り組む際に必読の内容が含まれている。

慶應義塾の創始者である福澤諭吉は「実学」という言葉にサイヤンスというルビをふり、単に実際に



役立つ学問という意味だけではなく、「事象の真理を実証的に解明し問題を解決していく科学」という意味を込めたといわれている。本書は肉眼的解剖学により手術手技の背景にある真理を明らかにし、脊椎手術に資するまさに「実学」の書である。脊椎手術に携わる外科医は座右におくべき書であると自信を持ってお勧めしたい。

A4・頁196

2017年5月

定価：本体16,000円＋税

[ISBN978-4-260-03044-1]

医学書院 刊